

子ども同士の共感的な関係性の育ちに関する一考察

～見ることから始まる相互理解を手がかりとして～

○高石 史子 (愛育養護学校) 佐治 由美子 (愛育養護学校)

【はじめに】

平成30年度現在、小学部2年生であるA男とM夫は、幼稚部年中の二学期にA男が転入してから同じクラスに在籍している。お互いを意識し一緒に遊びたい気持ちは双方にあるもののタイミングが合わず、それぞれが頼りにしている保育者やものを巡ってぶつかりあう日々が続いた。言葉での表現が難しかったM夫に叩かれることもあり、A男がM夫を怖がる時期もあった。しかし、1年生になった頃には、A男は登校すると「Mはどこ？」と保育者に尋ねて一日を始めるようになった。M夫が居るところへ保育者と一緒に行き、遊んでいる様子をじっくりと見ていたが、M夫の遊びが佳境に入るタイミングでA男のしたい別の遊びに繰り返し誘うこともあり、気をそがれたM夫がその場を離れることが多かった。その場に一緒に居た筆者は、他者の気持ちを理解することの難しさをA男に感じていた。それぞれの状況や思いを推し量りながら双方に伝えていたが、二人の気持ちに届いている手ごたえが持てずにいた。一緒に遊びたい様子が見られる二人に、どのような形でかかわったらいいのかを思案しつつ焦りを感じる日が続いていたなかで、A男が他児の様子や保育者の動きをよく見ていることに気が付いた。A男自身の言葉の中にも「Aくん、見てる」「○○(友達の名前)見に行こう」「Aくんやるよ、見てて」等の表現があり、それを様々な意味合いで使用していた。A男が他児とのかかわりを作っていく中で、「見る」という行為がどのような意味をもっていたのか改めて考えてみたい。

【方法】

愛育養護学校(特別支援学校)の日々の保育の中で、A男とその同級生であるM夫がかかわり合う場面を事例として取り上げ考察を加える。期間は平成29年12月から平成30年11月までとする。平成30年度は1・2年生7名の複式クラスで、常勤二名、非常勤三名でチームティーチングをしている。筆者は平成29年度からクラス担任となった。

【事例と考察】

事例1 「M、なにやるのかな」平成29年12月

ものを巡ってぶつかりあい、M夫が獲得して終わる。少し離れたソファに寝転がって泣いていたA男は、M夫がホールにあるマットの上に立っているのをじっと見ている。M夫の居るマットの隣に筆者と座り「M、なにやるのかな」と言う。M夫はA男が見ているのを視線を時々向けて意識しつつ、戦いのポーズを何回も決める。A男は次第に嬉しそうに笑い声をあげながらじっと見る。M夫の表情が柔らかくなり、はりきって続ける。いつのまにか二人で手をつなぎ、笑いながらトランポリンを跳び始めた。

考察

ぶつかりあった後、A男は「Mがとったー！Aくん欲しかったのに。なんでなんだよ、なんでなんだよ」と大きな声で泣きながら訴えた。筆者は黙って頷きながら聞いていた。しばらくすると「Aくん、どうしたらいいんだよ」と言いながら筆者の背中におぶさり、「Mのところに行って」と言った。筆者はA男が獲得できなかったものを取り返そうとしているのか、M夫に何かを言いに行こうとしているのか、他のことなのか判断しかねたが、どのようなことになっても二人を支えたいと思いそばへ行くと、A男はマットに腰かけてM夫のことをじっと見た。「M、なにやるのかな」とA男が筆者に言ったのをきっかけにM夫はA男を意識しながらポーズを決めるとA男はそれを見ながら笑顔を浮かべ、しばらくしてふたりで遊び始めた。その様子を見て、筆者は二人の間でなにが起こったのか直ぐにはわからず、当惑した。相手を責める視線でも威圧感を与える見方でもなく、A男がM夫をただまっすぐに見てそこに居続けたことは、「仲良くしたい」「一緒に遊びたい」というA男の思いが相手に伝わる行為になっていたのではないかと、この日の振り返りの中で考えた。

事例2 ままごとあそび 平成30年6月

クラスルームのキッチンセットの前でM夫が鍋に肉や野菜を入れておままごとをしていた。隣に腰かけて見ていたA男が皿やカップをテーブルに並べる。更にM夫がやっているのを横目で見ながら自分もやかに肉を入れ、M男と同じように「焼けた！」といいながら味付けをする。A男が皿の上に調理が終わった肉や野菜を置くと「M、見て、できたよ」と声をかける。M夫はちらりと見て「お、いいね」と答えた。

考察

事例1の頃やそれ以前には、相手が熱中して遊んでいる時にA男が自分のやりたい別の遊びへと繰り返し誘うために、最終的に遊びが中断することが多かったが、事例2ではM夫のしていることを見て、同じ空間に居る相手を感じながら、A男も並行して同じ遊びをするようになった。面白そうな遊びをM夫がやっている時も、「Mやって、Aくん見てる」と隣に腰かけてその様子を楽しそうに見ているだけで遊びに加わろうとしないことに筆者はじれったさを感じるほどだった。しかし、A男が長い時間をかけてM夫の遊びを見てきたからこそ、M夫の気持ちを読みとり、それに合わせる形で一緒に遊ぶことができたのではないだろうか。これは、一緒に遊んでいる実感を二人がもてた場面だったのではないかと推察する。

事例3 「M、ごめんね」平成30年11月5日(月)

A男が読もうとしていた電車の本をM夫がどうしても欲しくなる。本の端を力いっぱい引っ張り合う。(中略)M夫が力づくで本を獲得し、調理室を出た。「Aくん、まけたー！Aくんの本なのに、Mがもってっちゃった。くやしいよ！」と大粒の涙を流しながら訴える。筆者は「そうだよ、残念だよ」といいながら背中をなせる。(中略)二人のやりとりを見ていて、M夫と一緒に退出した実習生が戻って来て「Aくん、持ってきたよ。内緒だよ」と言って本を手渡した。本をパラパラとめくっていたが読み込まない。しばらくしてA男は「Mのやつめー」とつぶやき、筆者に「M、見に行こう」と言った。「M、見に行くの？(本読まなくていいの?)」と聞くと「うん、M見に行く」と答えた。会議室のソファにM夫がひとりであつむきかげんで座っていた。A男がM夫の隣に座ると「M、ごめんね」と言いながらそっと肩に触れた。それを聞いたM夫が「Aくん、ごめん」と顔を見ながらつぶやいた。顔を見合せて笑いあう。それから二人はお互いの身体に触れ合いながら楽しそうにレゴ人形を使って遊び始めた。

考察

ぶつかり合う時、二人が互角にやりあっていることや今までの関係性から考え、筆者は二人に任せて見守っていた。M夫に取られてしまった大好きな本を実習生がこっそりと持ってきてくれた時に、A男の興味は本ではなくM夫に向けられた。A男がM夫の様子を気にかけて見

に行き、しょんぼりとしているM夫の姿をしばらく見て口にした「M、ごめんね」という、出来事の文脈には合わないような言葉がきっかけとなり、それを受けとめたM夫も自分の思いを伝え仲直りをした。長い時間をかけてM夫を見てきたA男は、M夫の思いや言いたいことを感じ、共感し、その思いを汲んで思わず口にしたのではないだろうか。また、それがM夫の思いにフィットしていたのでM夫も自分の思いを言い返し、気持ちもほぐれて遊び始めることができたのだと考えられる。見ることを積み重ねていくうちに相手の思いに気づき、そこから関係性を修復する動きをつくり出すところまで子どもたちの力で到達することができたのではないだろうか。

【おわりに】

M夫が能動的にしていることに自分は参加せず、ひたすらにそれを見ていたA男の行為は受動的なものと思われがちである。しかし、事例1ではぶつかり合ったM夫に肯定的なまなざしを向けることで相手とかかわりたい思いを伝えている。また、事例2ではM夫の遊びをよく見て理解していたので、その場に合わせた遊びを二人ですることができた。事例3では相手の思いに気づき、それに共感的にかかわることで関係を修復する動きをA男が作った。「見る」ことを積み重ねることによって、相手がしていることを自分の中に取り込み、相手の思いやしていることを理解し、関係を育んだり、修復したりする動きをつくり出すことにつながっていると言えるだろう。そのことから、A男がM夫との関係を育むうえで「見る」ということは能動的かつ積極的な行為であるといえる。

保育の中で「見る」ことを考える時、子どもが「その存在自身の目を持っている¹⁾」ということに、保育者が敬意をはらってかかわっていけるかどうかが大切になるだろう。子どもが安心して見て感じる時間、見たことを自分の中に取り込み自分のものにする時間、自分で決めて行う時間を保障していくことに力を注ぎつつこれからも保育をしていきたい。

¹⁾津守真『保育の一日とその周辺』フレーベル館、1989、p46